

**第60回愛知県総合教育センター研究発表会**  
**テーマ「新学習指導要領に基づく授業づくり」**  
**令和2年11月27日（金） 愛知県総合教育センター**

第60回愛知県総合教育センター研究発表会を、「新学習指導要領に基づく授業づくり」というテーマの下で、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当日はZoomを用いたオンライン開催、令和2年12月10日から令和3年1月7日までは、オンデマンド動画配信を行った。オンライン開催には約300名の参加者、オンデマンド動画の視聴回数は、延べ約1,800回となった。  
以下にこれらの概要を紹介する。

### 1 開会行事次第

- ・開会のことば
- ・所長挨拶
- ・基調提案
- ・閉会のことば

### 2 講演

◆演題 「新学習指導要領がめざすカリキュラム・マネジメント ―指導と評価の一体化を中心に―」

◆講師 千葉大学特任教授

天 笠 茂 氏

### 3 研究発表・研究協議

次の各研究についてオンラインによる発表と協議を行った。なお、各研究の詳しい内容については、当センターウェブページ「研究紀要第110集（令和3年4月1日掲載予定）」参照。

#### ◇第1部会（小中高特）

学校教育目標を実現するための社会に開かれた教育課程の在り方に関する研究（中間報告）

##### 【発表・協議の概要】

「学校教育目標を実現するための社会に開かれた教育課程の在り方に関する研究」について基調提案と研究協力校6校の研究発表を行った。

基調提案では、新学習指導要領に示された「社会に開かれた教育課程」についての三つのポイントや捉え、研究の目的や方法について報告した。また、研究発表では研究協力校の6名の代表委員より、各校での取組を発表した。

研究発表では、各校がグランドデザイン策定のために取り組んだ「現状把握シート」「SWOT分析」「カリキュラム・マネジメントアンケート」などの紹介と、地域との関わりのある授業実践を発表した。グループ協議では、参加者の学校での地域と関わりのある取組や地域への発信の工夫などについて意見交換を行った。その中では、「コミュニティスクールの組織づくり」「地域と関わる取組をいかに学校全体として組織的に取り組むか」などが話題となった。

## ◇第2部会（小中高特）

多様な校種における情報モラルとICTを活用した授業実践の研究

### 【発表の概要】

「多様な校種における情報モラルとICTを活用した授業実践の研究」について、2研究合同の基調提案後、「情報モラル教育に関する研究」と「情報教育の充実に関する研究（ICT授業活用に関する研究）」に別れ、それぞれの研究協力委員4名の実践発表を行った。

研究概要を説明後、大学教授による基調提案にて、教育の情報化の進展、GIGAスクール構想、主体的・対話的で深い学びのキーワード提案があり、情報モラル教育とICTを活用した授業実践の必要性や意義について説明がされた。

### 【情報モラル教育に関する研究】

研究協力委員4名が、「児童の実態に応じた情報モラル教育の実践」「情報社会で生きるためのコミュニケーション力の育成」「短時間複数回のアプローチによる情報モラルの定着」「情報モラルに関する問題を自らの問題として捉え、主体的な課題解決を促すために」という実践を報告した。

### 【情報教育の充実に関する研究（ICT授業活用に関する研究）】

研究協力委員4名が、「弱視などの視覚障害がある生徒のためのiPadの効果的な活用法やZoomによるオンライン美術鑑賞交流授業」「ロイロノートを利用し、自己評価、振り返りを行った数学Iの授業」「地理情報システム(GIS)を利用し、自然災害に関する考察をした地理Bの授業」「プログラミングソフト『ScratchJr』を活用した算数の授業」について実践を報告した。

## ◇第3部会（小中高特）

いじめの組織的な未然防止に関する研究（中間報告）

### 【発表・協議の概要】

「いじめの組織的な未然防止に関する研究」について、基調講演と基調提案、研究協力委員4名の研究発表を行った。

基調講演では、愛知教育大学中井准教授から「『いじめ』に対する認識の差異に関わる要因」について、三つの要点から話をいただいた。基調提案では、いじめの「未然防止」と「組織的」な取組について、その意義や進め方を説明した。研究発表では、「いじめ」に対する認識を共有するためのアンケート調査についての概要を説明し、研究協力委員の4名より、各校でのアンケート調査の活用例を報告した。

感想交流では、「『いじめ』に対する認識についてのアンケート調査」と多くの学校で取り組まれている「いじめの実態把握調査」との使い分けについてや、校内連携に加えて校外連携の仕方に関して質問があった。また、アンケートを活用して教員同士で考えを共有することは、予防につながるので活用したいという意見が出された。

#### ◇第4部会（小中高特）

県立高等学校教育課程課題研究（地理歴史，公民）

##### 【発表の概要】

「県立高等学校教育課程課題研究（地理歴史，公民）」の研究発表を行った。研究の趣旨説明に続き、「授業実践開発班」と「オンライン学習支援コンテンツ開発班」に分かれて実践発表を行った。

本研究では、「思考を活性化する発問の在り方」と「資料の効果的な提示」に着目して，新学習指導要領に基づく授業の在り方を昨年度より追究してきた。研究の方法として，深い学びに結びつく「思考を活性化する発問」を考察し，また「発問」が有効に生かされる「資料」を用いて，各研究員がそれぞれの所属校で授業実践を行うようにした。今回の発表では上記手法に基づく授業実践を日本史A，世界史B，地理B，現代社会，倫理において行い，その成果と課題について6人の研究員が報告した。

「オンライン学習支援コンテンツ開発班」の発表では，休業期間中に研究員が作成したインターネットを用いたオンラインによる学習支援を目的としたコンテンツを8名の研究員が発表した。研究員が作成したコンテンツを，「授業の代替を目的としたもの」「授業内容の補足を目的としたもの」「通常の授業の中でオンラインコンテンツを活用したもの」の三つに類型化した。オンラインコンテンツを地理歴史科，公民科の学びの本質により近づけることができるような改善の視点や，作成しやすくなるようなヒントも発表に加えて報告した。

#### ◇第5部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（理科）

##### 【発表・協議の概要】

「県立高等学校教育課程課題研究（理科）」の研究発表及び研究協議を行った。本研究は，副題に「高校理科の授業で活用できる一枚ポートフォリオの開発と観点別学習状況の評価について」と題し，新学習指導要領の実施に向けて授業内で活用できる支援ツールの開発と育成を目指す資質・能力に対応した三つの観点別学習状況の評価，特に「主体的に学習に取り組む態度」を評価するための手法を考えた。部会は，全体会と分科会の2部構成で実施した。

全体会では，研究の趣旨説明に続き，科目の特性や生徒の実態に即して開発した4種類のポートフォリオのモデル（標準型，「R80」型，簡略型，図示型）について，研究員の代表4名が発表した。また，分科会では，4種類のポートフォリオのモデルごとに分かれて，他の研究員の事例発表やポートフォリオを用いた評価の演習等を行い，各研究員について協議を行った。

#### 4 教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオについて

##### ○県立惟信高等学校 藤原 美里 養護教諭

###### テーマ「高校の保健室における青年期うつへの早期発見と対応

###### ー多角的アセスメントから認知行動療法的アプローチへー

本研究では、年々増加傾向にある不登校など不適応行動の原因としての青年期うつへの認識を深め、高校の保健室において早期発見するための、多角的アセスメントとその対応としての認知行動療法的アプローチの検討を行った。多角的アセスメントの一つとして、新たにアセスメントシートを作成し、青年期うつを見逃すことなく、適切な支援につなぐための材料となるよう検討した。さらに、それらを活用した支援プログラムを一つの案として提示した。養護教諭が認知行動療法を学び、今までの経験的な関わり方にその理論と技法を取り入れることで、生徒を多角的に理解し幅広い対応につなげていきたい。そして、生涯にわたってうつ病を予防するためのセルフヘルプを実践できる人間の育成につながることを期待している。

##### ○県立新川高等学校 村瀬由香里 養護教諭

###### テーマ「家族システムの視点から不登校を考える ー高校生の不登校事例を通してー」

不登校の生徒数は年々増加しており、不登校支援が喫緊の課題となっている。本研究では、家族システムの視点から、不登校を本人の問題として捉えるのではなく、家族システムの問題と捉え、教員などの第三者が「ジョイニング」「リフレーミング」などの技法を用い、問題が生じている悪循環を見だし、断ち切ることが有効であると考えた。また、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を生かし、学校内外と連携した不登校支援を考察した。

##### ○県立刈谷東高等学校 山本 祐子 教諭

###### テーマ「事例から教育相談『チームとしての学校』を考える

###### ー教員、スクールソーシャルワーカーの連携事例を通してー

高等学校教員とスクールソーシャルワーカー（SSW）の連携事例から「チームとしての学校」を考えた。研究1でSSW、教育相談コーディネーター（教育相談CO）の職務、連携の課題を調べ、研究2では事例研究会等で報告されたSSWと連携した実践報告事例を分析した。また、教員とSSWの連携の様子より、教育相談COの役割を考察した。研究3では二つの事例から支援の共通点と相違点を挙げ、連携の在り方を考察した。「チームとしての学校」とは、風通しのよい人間関係の中で、教員、SSWが「巻き込まれ」やケース会議などの経験を積みつつ専門性を高め、「優しい心」をもち、流動的な役割分担と「巻き込まれ」の構造を自覚して複数人で支援していくことと考えられた。